

講師プロフィール

山崎 甲一 (やまざき こういち)

所 属 東洋大学文学部日本文学文化学科
東洋大学東洋学研究所
東洋大学大学院文学研究科

職 名 教授

学 位 博士 (文学)

【専門分野】

日本近代文学 (主に明治以降の近現代文学・文化論)

【主な著書】

『芥川龍之介の言語空間』笠間書院 1999 年

『夏目漱石の言語空間』笠間書院 2003 年

『無限大な安吾』(編著) 菁柿堂 2007 年 (販売: 東洋大学生生活協同組合) 他

【所属学会等】

日本近代文学学会

森鷗外記念会

川端康成学会

芸術至上主義文芸学会 他

「女学生」講演資料

平成28年2月17日
於大女子寺集落開演
東洋大学 山崎甲一

七月十五日（晴）

昨日、私は、素子は矢田津世子だと云った。これは言い過ぎのようだ。やっぱり素子は素子なのだ。手を休めるとき、あの人を思いだす、とても苦しい。素子はあんまり女体のもろさ弱さにくさを知りすぎているので、客間で語る言葉にならないのではないかと書いた。あの人の死んだ通知の印刷したハガキをもらったとき、まだ、お母さんが生きていられるのが分ったけれども、津世子は「幸うすく」死んだ、という一句が、私はまったく、やるせないで、参った。お母さんは死んだ娘が幸うすく、と考えるとき、いつも私を考えているに相違ない。私は勿論、葬式にも、おくやみにも、墓参りにも、行かなかった。今から十年前、私が三十一のとき、ともかく私達は、たった一度、接吻ということをした。あなたは死んだ人と同様であった。私も、あなたを抱きしめる力など全くなかった。ただ、遠くから、死んだような頬を当てあつたようなものだ。毎日毎日、会わない時間、別れたあとが、悶えて死にそうなる苦しさだったのに、私はあなたと接吻したのは、あなたと恋をしてから五年目だったのだ。その晩、私はあなたに絶縁の手紙を書いた。私はあなたの肉体を考えるのが怖しい、あなたに肉体がなければよいと思われて仕方がない、私の肉体も忘れて欲しい。そして、もう、私はあなたに二度と会いたくない。誰とでも結婚して下さい。私はあなたに疲れた。私は私の中で別のあなたを育てるから。返事も下さるな、さよなら、そのさよならは、ほんとにアデューという意味だった。そして私はそれからあなたに会ったことがない。それからの数年、私は思惟の中で、あなたの肉体は外のどの女の肉体よりも、きたなく汚され、私はあなたの肉体を世界一冒瀆し、憎み、私の「吹雪物語」はまるであなたの肉体を汚し苦しめぬさいなむ畸形児の小説、まったく実になさけない汚い魂の畸形児の小説だった。あなたはもしあれを読んだら、どんなに、怒り、憎んだことか、私は愚かです、何も分らない、何をしているのか、今も昔も、まるで、もう、然し、それは、仕方がない。私はあなたが死んだとき、私はやるせなかつたが、爽かだった。あなたの肉体が地上にないのだと考えて、青空のような、澄んだ思いも、ありました。

私は今も亦、あなたの肉体を、苦しめ、汚し、痛めているのだ。私はあなたの肉体を汚そうと意図しているのではなく、いつも、あなたの肉体や肉慾を、何物よりも清らかなものに書くことができますように、ほんとにそう神様に祈っています、書きはじめると、どうしても、汚くしてしまふ。私は昔から悪人を書きたくないのです。善いもの、美しいもの、善良な魂を書きたいのだが、書きだすと、とんでもなく汚い悪い人間、醜悪な魂に、自然にそうなってしまう。自然にどうしても、そっちの方へどんどん行ってしまう。私は筆を休めるたび、あなたを思いだすと、とても苦しい。素子の肉体は、どうしても、汚い肉慾の肉体になつてしまふ。素子は女体の汚さ、もろさ、弱さ、みにくさを知りすぎているので、客間で語る言葉にならないのではないかと書いて、筆を投げだしたとき、私はあなたの顔をせつなく思いつづけていた。あなたは時々、横を向いて、黙ってしまうことがあつた。あのとき、あなたは何を考えていたのですか。素子は矢田津世子ではない。素子は素子でなければいけない。素子は素子だ。どうしても、私は、それを、信じなければならぬ。私は四枚書いた。筆を投げだしてしまう時間の方が多いのだ。

（昭二、一近、代、文、学）

彼と生活して、彼の孤独と向きあっていると、その淵の深さに、身ぶるいのすることはある。誰もひとを寄せつけない。彼はいつも、たった独りでいるような心のありさまで、お酒を飲んで、わあわあといっているときでも、その奥に、たった独りの彼が坐っている。私はそれをちゃんと見抜くことが出来る。私はいつか、彼の何だろう、と思うことがある。彼の中にしめている私の位置や、分量を、必死の思いで考えていることがある。こういう心境は、「青鬼の禪を洗ふ女」の女主人公がいつかと同じである。

彼があばれたりするキッカケが、ああではないか、こうではないか、と臆測するだけで確かなことはわからない。何かのキッカケで爆発が起こったとしても、それは間接的な原因であるに過ぎないと思う。芯はもつと根深くて、どうにもならないもののような気がした。でなかったら彼が、どうしてあんなに憂鬱な手のつけようもない、孤独な顔をして暮らしていたのだろうか。

彼の笑い声は高らかに丸みを帯びて明るくカラッとしているのに。周りのもの、みんなが嬉しがるような笑い声なのに。私はそんな彼の笑い声に憧れるときがあった。

例によって彼がお酒を飲み、私が紅茶を何杯も飲んでいるときに、いつか聞いてみたいと思っていたことを聞いて見た。

「いまは矢田津世子（昭和十九年に没した女流作家）さんのこと、どう思っているの？」

「バカだねえ、もう死んでしまったひとじゃないか」とぼつんといった。

私はそれでいっぺんに納得のいった気持になった。死んでしまったひととは戦きにならないということだ。もうお話の続きはないし、どう発展しようもないことだ。何もかも生きていけばこそその話。

(坂口三平、昭和三年日記)

叱る母もなく、怒る女房もないけれども、家へ帰ると、叱られてしまう。人は孤独で、誰に気がねのいらぬ生活の中でも、決して自由ではないのである。そうして、文学は、こういうところから生れてくるのだ、と僕は思っている。

(日本文化私観、昭和三年現代文学)

他の発見のないところに真実の文化が

ありつべきはずはない。自我の省察のないところに文化のありつべきはずはない。

(続堕落論、昭和二年文学界)

武蔵の剣法といふものは、敵の気おくれを利用するばかりでなく、自分自身の気おくれまで利用して、逆に之を武器に用ひる剣法である。溺れる者藁もつかむ、といふさもしい弱点を逆に武器にまで高めて、之を利用して勝つ剣法なのだ。

之が本当の剣術だと僕は思ふ。なぜなら、負ければ自分が死ぬからだ。どうしても勝たねばならぬ。妥協の余地がないのである。かういふ最後の場では、勝つて生きる者に全部のものがあり、正義も自ら勝つた方にあるのだから、是が非でも勝つことだ。我々の現下の戦争も亦然り。どうしても勝たねばならぬ。

(青春論、昭和二年文学界)

今日からお前は俺の女房だと言うと、女はうなずきました。

手をとって女を引き起すと、女は歩けないからオプっておくれと言います。山賊は承知承知と女を軽々と背負って歩きましたが、険しい登り坂へきて、ここは危いから降りて歩いてもらおうと言つても、女はしがみついて厭々、厭々、と言つて降りません。「お前のような山男が苦しがるほどの坂道をどうして私が歩けるものか、考えてもらんよ」

「そうか、そうか、よしよし」と男は疲れて苦しんでも好機嫌でした。「でも、一度だけ降りておくれ。私は強いんだから、苦しくて、一休みしたいというわけじゃないぜ。眼の玉が頭の後側にあるというわけのものじゃないから、さっきからお前さんをオプっていてもなんとなくどかしくて仕方がないのだよ。一度だけ下へ降りてかわいい顔を拝ましてもらいたいものだ」

(昭和二年、肉体)

ここにおいてか諸君、余は奮然蹶起したのである。打倒蛸！ 蛸博士を葬れ、しかし、膺懲せよ憎むべき悪徳漢！ しかりしかり。ゆえに余は日夜その方策を練ったのである。諸君はすでに、正当なる攻撃は一つとして彼の詭計に敵し難いゆえんを了解せられたに違いない。しかして今や、ただ一策を地上に見出すのみである。しかり、ただ一策である。ゆえに余は深く決意をかため、烏打帽に面体を隠してのち、夜陰に乘じて彼の邸宅に忍び入ったのである。長夜にわたって余は、錠前に関するおよそあらゆる研究書を読破しておいたのである。そのために、余は空気のごとく彼の寝室に侵入することができたのである。そして諸君、余はなんのたわいもなくかの憎むべき髪を余の掌中に収めたのである。諸君、目前に露出する無毛赤色の怪物を認めた時に、余は実に万感胸にせまり、溢れ出る涙を禁じ難かったのである。諸君よ、翌日の夜明けを期して、かの憎むべき蛸はついに蛸自体の正体を遺憾なく曝露するに至るであらう！ 余は躍る胸に髪をひそめて、再び影のごとく忍び出たのである。

しかるに諸君、ああ諸君、おお諸君、余は敗北したのである。悪略神のごとしとはこれか、ああ蛸は曲者の中の曲者である。誰かよく彼の深謀遠慮を予測しつるであらうか。翌日彼の禿頭は再び髪に隠されていたのである。実に諸君、彼は秘かに別の髪を貯蔵していたのである。余は負けたり矣。刀折れ矢尽きたり矣。余の力をもってして、彼の悪略に及ばざることすでに明白なり矣。諸君よ、誰人かよく蛸を懲す勇士なきや。蛸博士を葬れ！ 彼を平和なる地上より抹殺せよ！ 諸君は正義を愛さるか！ ああ止むを得んしだいである。しからば余の方より消え去ることにきめた。ああ悲しいかな。

(昭々、青い馬)

人間でも、私に逃げられることが不安なのだ。そして私が他日私の意志で逃げることを怖れるあまり、それぐらいなら自分の意志で私を逃がした方が満足していられると考える。鬼は自分勝手、わがまま千万、途方もない甘ちゃんだった。そしてそんなことができるのも、彼は私を、現実をほんとに愛しているのじゃなくて、彼の観念の生活の中の私はいいのよ！ モチヤの一つであるにすぎないせいでもあった。

「秋になったら、旅行しよう」
「ええ」
「どこへ行く？」
「どこへでも」
「たよりない返事だな」
「知らないのですもの。びっくりするところへつれて行ってね」
彼は頷く。そして又コクリコクリやりだす。
私は谷川で青鬼の虎の皮のフンドシを洗っている。私はフンドシを干すのを忘れて、谷川のふちで眠ってしまった。青鬼が私をゆさぶる。私は目をさましてニッコリする。カッコのホトトギスだの山鳩がいない。私はそんなものよりも青鬼の調子外れの胸間声が好きだ。私はニッコリして彼に腕をさしだすだろう。すべてが、なんて退屈だろう。然し、なぜ、こんなに、なつかしいのだろう。

(昭々、10巻と美)

すでに、すべてが、絶望だった。背筋を走る悲しさが、つきあげた。
「私はここで、今、死にます」大納言は絶叫した。「私が死んでいいのでしょうか！ 私の命は、つゆ惜しいとは思いません。残されたあなたは、どうなるのですか！ せめて、ひとめ、あなたが、見たい！ 人の一念が通るなら、水に顔をうつして下さい！」
大納言は水をみた。真赤な口をひらいた顔があるばかり。せせらぐたびに、赤い口もゆがんで、のびて、血が走り、さんさんと水は流れた。

私は、ここに、このような、あさましい姿となつています。しかも、あなたの悲しさの一分すらも、うすめることができません。あなたは、いま、どこに、どのようにして、いられますか。もはや、お目覚めのことでしようね。このうすぎたい地上でも、あなたの目覚めに、なお、いくらかは優しい慰めを与えたものがあつたでしょうか。もう、郭公も、ほととぎすも、鳴く季節ではありません。せめて、うらかな天日が、夜の嘆きを、いくらか晴らしはしませんでしたか。また、一夜のねむりが、悲しさを、いくらか和らげはしませんでしたか。ああ、どうしていいのか、私は、もはや、わからない……

私は戦争中に自伝めく回想を年代記的に書きだした。戦争中は「二十一」というのを一つ書いただけで、発表する雑誌もなくなってしまったのだが、私がこの年代記を書きだした眼目は二十七、それから三十であった。つまり、矢田津世子に就てであった。

私は果して、それが書きうるかどうか、その時から少からず疑っていた。ただ、私は、矢田津世子に就て書くことによつて、何物かが書かれ、何物かが明かにされる。私はそれを信じていることができたから、私はいつか、書きうるようにならなければいけないのだと考えていたのであった。

ある日、酔つ払つた寅さんが、私たちに話をした。時事の編輯局長だか総務局長だか、ともかく最高幹部のWが矢田津世子と恋仲で、ある日、社内で日記の手帳を落した。拾つたのが寅さんで、日曜ごとに矢田津世子とアイビキのメモが書き入れてある。寅さんが手帳を渡したら、大慌てでポケットへもぐしこんだという。寅さんはもとより私が矢田津世子に恋していることは知らないのだ。居合せたのが誰々だったか忘れたが、みんな声をたてて笑つた。私が、笑い得べき。私は苦惱、失意の地獄へつき落された。

【二十七歳】

私の心の何物か、大いなる諦め。その暗い泥のような広い寂みは、いわば、一つの疲れのようなものであった。その大いなる寂みの中では、矢田津世子は、たしかに片隅の一ときれの小さな影にすぎながつたが、その寂みの暗い厚さを深めたもの、大きな疲れを与えたものは、あるいは、矢田津世子であるかも知れぬと考える。

（昭二、る新潮）

三十歳

私はこうして女の情慾に逆上の怒りを燃やすたびに、神聖なものとして、一つだけ特別な女、矢田津世子のことを思いだしていた。もとより、それはバカげたことだ。もとより當時からそのバカらしさは氣付いていたが、そうせずにはいられたただけである。

私は然し、今日、私がこのように平靜でありうるのも、矢田津世子がすでに死んだからだと信ぜざるを得ないのである。

思えば、人の心は幼稚なものであるが、理窟では分りきつたことが、現実ではママならなののが、その愚を知りながら、どうすることもできないものであるらしい。

矢田津世子が生きている限り、夢と現実との距りは、現実的には整理しきれず、そのいずれかの死に至るまで、私の迷いは鎮まる時が有り得なかつたと思われる。

矢田津世子よ。あなたはウヌボレの強い女であつた。あなたは私を天才であるかのようなことを言いつづけた。そのくせ、あなたは、あなたの意地わるい目は、最も世俗的なところから、私を卑しめ、蔑んでいた。

（昭三、る文芸界）

信頼ははかない虚構だといふ貴方のお言葉は真実です。知性と人間との関係は、前者が後者をエゴティストに設計したところから始まり、エゴティストは自らを信頼することによつて彼の信頼の全部が已に終つてゐるのでせうね。私達にとつて、他を信頼することは自己を棄てることであり、罪惡的な謙遜ですらありうることを私も否定はできません。

映像が実体を拒否するといふ貴方のお言葉に対しても、矢張り僕自らに共通するひとつの宿命を認めはします。然し私には分らないのです。貴方のお言葉が、ではなく、このこと自体の明確な判断がつかねてゐます。実体は映像に劣つてゐる、けれども、映像は実体に劣つてゐる……なぜなら私達自らが実体だから、さういふことが言へないこともないではないか？